テロ国家アメリカを描く本と映画

当研究所理事・下関市立大学学長　下山　房雄

老いの哀しみということになろう。赤馬通信前号と第１号とで３行ばかり殆ど同じ表現があった。一旦書いたことを忘れていたのである。年寄りの話はくどいと言われるように繰り返しが多い。そういう行状を私もやってしまった。所報読者にお詫びしたい。

気がついてみれば、もう「ながら」では仕事が出来なくなっている。かっては、ＦＭを聴きながら原稿を書き、テレビを観ながらモノを読んでいた。しかし、もうそうはできなくなった。寂しいが自然の理だ、仕方ない。そこで年末年始、ただ本を読むだけ、ただテレビを聴視するだけということを、何時間かやった。その感想が今回の通信です。

まず、チョムスキー『９．１１　アメリカに報復する資格はない！』(文芸春秋 2001 年 11 月 30 日刊　1143 円)。この本は、「毎日」の書評（01. 12. 02 池澤夏樹）と「赤旗」のコラム（01. 12. 05 潮流）とで知って、注文入手した。私が買ったのは 12 月 15 日二刷のものである。原著の刊行は 2001 年としか紹介されてないが、収録されているインタビューの最終月日が 10 月 5 日だから、その後ということになる。これらの日付から、すばやい訳書の刊行、悪くない売れ行きという好ましい事態の進行がわかる。チョムスキーについては、ベトナム反戦以来、アメリカ政府のやり方に反対する知識人の署名に折々名前が出る言語学者という程度の知識しかなかった。著書を読むのは、初めて。この本の解説で、彼の著作はソ連で「禁書」だったということも初めて知った。この本はチョムスキーの本職ではない時事評論であるから判らないのだが、彼の言語学がスターリン言語学とぶつかるものであるのか。

さて、本書の視角は、アメリカを現代の帝国主義国家とみている私の認識枠組みと一致するもので、特別驚くものではない。ただ挙げられている事実には、私の記憶にないものがかなりあり、刺激的だった。80 年代のニカラグア・サンディニスタに対するアメリカの暴力的介入は知っていたが「一九八六年に米国は国際司法裁判所で国際テロの廉で有罪を宣告された」が「判決を侮りとともに斥け、ただちに攻撃をエスカレートさせることで応じた」(本書 22-23 頁）ということはその最大のものである。チョムスキーは指摘する。アメリカの「テロ戦争はニカラグア軍の代わりに「柔らかな標的」―農業協同組合とか診療所のような無防備の民間標的―を攻撃するという公式の政策に合わせ、拡大した。米軍による完全な制空権とスーパーバイザーから与えられた高性能の通信機器のおかげで、テロリストたちはこうした命令を実行することができた。」(同書 95 頁)

この叙述は、ＮＨＫ衛星テレビが流したケン・ローチ監督『カルラの歌』(1987) の強烈な一場面と照応する。「アンジェラの灰」「フルモンティ」でイギリス・プロレタリアートの古今の生き様を演ずるロバート・カーライルが、この映画ではグラスゴー市バス運転手に成る。彼は、教養が浅くて妹に「ほんとにわかってんの？」と危ぶまれながら、内戦のニカラグアに向かう。無賃乗車で捕まりそうになったニカラグアからの女性を、持ち前の無鉄砲な正義感から救った縁で、彼女に惚れ込み、彼女の国を訪れ、そこでＣＩＡの訓練指揮のもとにテロを行なう「コントラ」の攻撃に遭遇するのである。衛星写真で学校、診療所を把握し、それを「軍事目標」とするテロ攻撃だ。彼とともに我々の教養もここでぐっと深まる。

マスメディアあるいは商業メディアの主流が当局発表垂れ流し報道に堕していることは否定のしようがないが、上掲のような作品を世に送る部分の存在は誠に嬉しい。(02/01/30)